

軒昂会

軒昂会会報 第32号
 発行者 日原 雄
 編集者 田村千秋
 発行日 平成22年4月
 URL : http://ct.photo-web.cc/kkk/
 会報 : http://ct.photo-web.cc/kkk/pdf

会報は年2回予定しています。
 皆様の原稿お待ちしております。
 頂いた方にはお礼申し上げます。
 原稿の送り先
 Eメール : ctamur@ybb.ne.jp



塔ノ沢一の湯本館
SUNOHARA KENKYU HOTSPRINGS

平成二十一年度総会のご案内

総会兼宴会を左記の通りご案内申し上げます。
 多くの皆様の参加、幹事一同お待ちしております。
日時 五月十三日(木)～十四日(金) チェックイン十五時
場所 箱根湯元 箱根一の湯(昨年までのホテルとは違ってます)
宴会費 参加会費一万一千円
当日、年会費二千円と合わせて一万三千円集金させていただきます。
 出欠用返信はがき同封してありますので四月二十日までにこ返送ください。
 箱根一の湯のパンフレット同封します。
 露天風呂、大浴場につきり一年ぶりの再会を祝いましょう。カラオケも用意しました。また有志の皆様から近況や活動のスピーチ頂ければと思っております。

六十四歳の派遣

宮本新司

岡山空港からだと、タクシーで二十分位出した。ただ難点はバスの終バスが二十時頃なのです。いよいよ岡山での工場生活が始まりました。仕事の内容は、コントロールパネルの監視です。原料を投入して砂糖が各フロアで異常が無いか監視をする役目です。実際の工場での各現場での仕事は製造要員がいます。何しろ全員が事務系から工場勤務ということでは先ず始めは大きなコントロールパネルに表示されている砂糖の流れのフローチャートの見方からです。次に、電気配線図の見方も指導を受け、また各ラインにある機械の説明も受けた。実際の稼働日数は、一ヶ月二十日、二十三日ぐらいたったと思えます。後の日は砂糖の流されるコンベアの清掃とか、必要があれば機械のメンテナンヌ(これは専門の機械部署の方が行います。)の間初めての見学らし、初めての夜勤勤務も体験した。そして、なによりも、アルコールを飲むことを覚えました。岡山に行く前は全然飲めなかったのが、なにせ寮にいてもやるのが無いから自然と酒盛りが始まり、また寮ばかりで飲んでいてもおもしろくないので町(当時はこういう言い方をしていました。)の方へ飲みに出かけました。何しろ最終のバスの時間が早いので、行き帰りタクシーのため一回飲みに行くとかかなりの出費でした。それにも懲りずよく飲みに出かけすっかりアルコールの味を覚えてしまった。この岡山にいたときに遊びに行ったのは、四国の栗林公園、屋島、金比羅様ぐらいでした。その他にも安芸の宮島とか小豆島にも誘われたのですが、飲む誘惑に負けていきませんでした。(後から考えると行っておけばよかったと反省した。)

そろそろ一年が過ぎようとしています。いつまでもこのまま工場暮らしをしていてもしようがないと思いつつ退職して横浜に帰ることにした。職安(当時

こういう言い方をしていました。)に行つて失業保険を貰いつつ仕事の紹介をしてもらいましたがなかなか気に入る仕事がありません。確か二回目のときだと思えます。紹介された仕事を断つたら「そんなに断るなら失業給付金を出さない」と脅かされそれならもう頼むものかと喧嘩をしたことを覚えています。そして友達を紹介でダムやトンネルを作るのにダイナマイトで爆破する会社に就職をしたのですが、仕事がありませんのでそこを三ヶ月位で辞め、次にタンクローリーでガソリンを運搬する会社を友達に紹介してもらい就職することにしました。この間に私も結婚し、子供も生まれるということもあってチャランとした会社に勤めようと思いつくか無いかと新聞の求人広告を来る日も来る日も探した。

アマダへの入社

そして、ついにはあったのです。経理の募集で、そうです!「アマダ」です。二部上場会社と書いてあったので二部上場会社なら大丈夫だろうと思いつつ早速応募をしました。当時の「アマダ」がどこにあつて、何をやる会社か?どういう会社かわからず応募した。(株式四季報で調べて行けばよかったのだが、でも、結果的には白紙の状態で行ったのがよかったのかもわからない)面接の連絡を受け試験に臨みました。場所は小滝橋です。小滝橋ってどこか解りません。まして新宿なんて全然縁のないところでした。送られてきた案内図に従っていききました。面接には、私も入れて3人が来ていた。初めに筆記試験がありました。裏面に続く

軒昂会だより

現在の会員数は四十四名です。
お願い
 平成二十年度軒昂会会費一千元会計までお振込みをお願いします。
 振込み先
 株式会社みずほ銀行厚木支店
 口座番号 二二二六九〇〇
 軒昂会代表者 コイズミイワネ

愛機帰還せず

我が紙飛行機入門記

菅原 忠雄

紙飛行機に出会ったのは二年前の夏のことであり。毎年夏場は陽が昇ると暑いので、早朝六時頃から早足でウォーキングをするのが日課であった。八月のある朝、ちよっとコースを変えて近くの野球のグラウンドを通りかかったら、自分と同年代に見える三人の人がゴムを引き絞って空へ何やら打ち上げていた。それが紙飛行機であった。空高く上がり、ゆっくりと旋回しながら飛行し、着地したら拾いに行く。「よく飛びますね」と話しかけたら中の一人が紙飛行機とゴムのカタパルトを持ってきていろいろ親切に説明してくれた。



孫娘に紙飛行機の飛ばし方を手ほどきしている筆者

「おたくは空を見ますか?雲の動きを眺めることがある?風の流れる?」とにこにこ笑いながら言い、最後に「よかったら一緒にやりませんか?紙を切ったり折ったりと手先を使い、飛行機を追いかけて沢山歩くから健康にも絶対いいですよ」と誘ってくれた。

愛機帰還せず

翌日の朝からグラウンドのベンチで作り方を教わった。紙は少し厚めのパンフレットやカタログ、雑誌の表紙、広告紙等を使い、箸や焼き鳥の串、太竹を裂いて削った棒などの先端に穴をあけてためのゴムと

訃報

さる平成二十一年十月十三日桜田忠男氏が逝去されました。心筋梗塞でした。軒昂会会報のこのコーナーに毎回投稿をお願いして世界の美術館や観光地の紹介をみことなタッチで楽しませていただきました。会報第十号から先号三十一号(二十一回)まで長期にわたり連載頂きました。今後投稿がなくなると考えますと残念でなりません。ご冥福お祈りいたします。

次にソロバンの試験がありました。そして面接です。七、八人(名前を覚えていたのは、田中部長、野林課長、内田部長、梅川課長、小松課長、久保田部長、……)肩書きは当時の肩書き)の面接官がいたと思います。ここで、面接で印象に残っているやり取りを、

Q・アマダは何を作っている会社か知っていますか？

A・私が知っているのは、タイムカードを作っていることぐらいです。

面接官・それは、アマノです。

宮本・(頭の中が真っ白、こりゃ駄目だ落ちた！それで玄関を入ったときに機械がチラツと見えたわけだ！)

Q・お父さんはどこに勤めているのですか？

A・工作機械を作っている新潟機械です。

Q・来年三月に伊勢原に移るのですが通えますか？

A・大丈夫です。通えます。

まさか、「アマダ」が工作機械を作っている会社とは知らずに面接に臨んだのは三人のうち私ぐらいだったと思う。家に帰ってきてこの結果を話すともう完全に駄目ね。と女房に言われ、私もそう思った。しばらくすると、隣の家から今日私のことを調査に来たという話があった。そして、それから四、五日してまた来たという知らせです。いったいどうなっているか聞かれ実は、これこれというわけですと説明した。駄目だとはかり思っていたところへいつから出社できるという電話が入りびつくりしました。なにしろ、「アマダ」と「アマノ」を完全に間違えていたわけですから。たぶん、初めの会社が、東証一部の上場会社。経理の仕事をしていたというのがよかったですのではないかと思っています。(やはり会社のブランドはたいしたものだと思つた。これは、次の仕事でもそう思いました。)

私が「アマダ」に入社したのは、大林さんが電算室に移ったその後釜だったので「アマダ」に入った後のことは、もうこ

存知の方もいらつしやるのでそれは割愛させていただきます。

その後

ASECを退職して暫くは失業手当を買つことにした。何しろ求人広告の給料と失業手当を比べたら失業手当のほうがよかつたからです。でも、これが後悔のもとだった。失業手当の期間が終わりに、家でぶらぶらしていてもしょうがないので次の就職先を探そうと思つてもありません。少しあせつてきた。求人広告、ハローワークと探しましたが、やはり、年齢の壁にぶち当たります。そこで、しょうがないので、シルバー人材銀行に登録した。シルバーで暫くは、封筒の袋詰め等の仕事を紹介してもらいながら長期に働けるところを捜すことにした。そして、シルバーから「セコムテクノサービス」を紹介してもらった。仕事は、入荷の員数チェックです。これは、ASECの倉庫でやっていたのと同じに慣れた。

初めは、二人体制で一週間に三日、四日なのローテーションなのでちょうどいいなと思つていった。用事があつたり、旅行に行くなどしたときは気楽にお互い交代してもらえり、同年代なので気が楽だった。しかしこれも長くは続きませんでした。というのも、ここに入ってきた荷物を、防犯機器を取り付ける協力会社の方が取りに来てユーザーさんに行つて取り付けるのです。そのため一度協力会社の方が取りにくる時間が無駄だということで、出荷場所から直接協力会社に直接送るほうが増えた。そのため、二人体制から、一人体制になり、一週間に一日、二日位の勤務になってしまった。そのため、暇な時間が増えてしまったので、何か仕事は無いか探していたらある日新聞の折り込み広告で、派遣会社の募集が目を引きました。それは、倉庫の募集でした。早速電話をかけてみるともう決まりましたというところ

愛機帰還せず 続き

輪ゴムを繋げてカタパルト(射出装置)にする。紙の大きさは八ガキ大(縦百五十三ミリ、横百ミリ)を基本とし、もう少し大きい百八十×二百二十から二百十×百四十位が工作し易いし飛ぶことも分かつてきた。材料費は全くかからず、カッターやゴムマット、ホチキス、鋏等の用具も殆ど百円ショップで間に合つてしまうからなんともお金のからかぬ遊びである。ただし、一生懸命作つても初めはなかなか上手く飛ばなかつた。「十機作つて飛ぶのは二、三機、十秒以上飛んだら成功だと思いなさい」と励まされた。

毎晩のように作り、翌朝飛ばすのが待ち遠しくだんだん虜になっていった。期待通りにゆつくりと上空で円を描いて飛んでくれると満足感に浸れたし微風はあつた方が良いが少し風が強くなるとあおられて墜落してしまう。早朝は風が少ないが、日中は風が出てくることが多い。

そのため早朝にやるのだが、夜露が残つていて外野の草地に着地するとすぐ濡れてしまう。なかなか絶好の飛行機日和は少ないものである。

秋も深まった頃、二十秒台を飛んでいた秘蔵の愛機が風に乗り、いつまでも高空を旋回して降下せず、旋回しつつも風に流されて一分を超えた頃場外へ出てどんだん西の彼方へ遠ざかり消えて行った。目分量で二百米以上飛び去つたようであった。

「回収は無理だね」と仲間宣告され、喜びと同時に無性に残念であった。あの帰らなかつた紙飛行機のこととは今でも忘れられないし、あれを超える機は未だ作れない。

紙飛行機は所詮紙なので朝露に濡れたり、硬いところに衝突したりすると翼のバランスを失つたり機首が折れ曲がつたりして劣化してしまう。

(平成二十一年五月)
以下次号ご期待下さい

編集後記

皆様からの原稿御待ちしてまず、また写真等の画像大歓迎です。尚投稿下さった方には謝礼(図書券)差し上げます。

菅原会員より、「愛機帰還せず」の原稿頂き連載します、お孫さんとの写真楽しそうです。

先号より「軒昂会フォトギャラリー」を設けました。皆様の作品お待ちしています。写真や画像はメールで送っていただいても、また郵便でも結構です。

今回も皆さまからの作品頂けなかつたので私がマクロレンズで撮つた蘭を載せさせてもらいました。

田村



小田原フラワーセンター 蘭展より

